



Title	社会経済史雑考：最終講義
Author(s)	田中，慎一
Citation	經濟學研究, 61(4), 153-173
Issue Date	2012-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48699
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_61(4)_153.pdf



<最終講義録>

社会経済史雑考

——最終講義——

田 中 慎 一

序

2010年3月16日、わたくしは人文科学・社会科学総合教育研究棟W103教室に入り、午後3時からの最終講義にのぞんだ。町野和夫研究科長兼学部長¹⁾による私の研究・教育・交際にわたる懇篤な紹介をうけて、私は聴講者に配布した口述原稿にもとづいて最終講義をおこなった。その口述原稿に、おもに註に加筆して成ったのが本稿である。講義口調の文章になっているのは、そのためである。「社会経済史雑考」が最終講義の題目であった。大学の最終講義は通常の講義と違って、聴講者を学生に限定するという枠をはずした公開的性格が比較的強いものであろう。現に当日がそうであった。講義には一種の演技の側面もあり、いわゆるパフォーマンスになりうるが、所詮は一過性で、瞬時の流動性のものである。講義内容は作品の

形をとることで、その内実を顕現するはずだから、最終講義も出来れば活字にして公開する場合があってもよいのではないかと考えたのである。しかも、作品がすべてを物語っているといわれることもあるから、高見順のいう「耳のある自画像」(『日本文学全集』28, 河出書房, 1969年, 351-352頁)にならって、ここに書き残しておくことにした。その心構えにしたのは、次のような台詞である。

「先生が、作家をもって自認されるなら、／思いきり文学に号令をかけなさい！／わたしどもの注文が何か、ご存じのとおりだ。／われわれは、強い酒が飲みたいんだ。／さっそくこしらえてもらいましょう！／今日やらなけりゃ、明日だってできやしない。／一日だって無駄にはすごしちゃならぬ。／まず、できそうなことは、思いきって／すぐ、その前髪を掴まえることだ。／掴んだからには手ばなしたくない、だから、／むりにも、やるところまで、かならずやるんだ。／ご存じのように、ドイツの舞台では、／各人がやりたいことを試みる。／だから、わたしに遠慮なく、こんどの芝居は、／背景も仕掛けも、好きなようにやってほしい。」(Goethe, *Faust*. 井上正蔵訳)

最終講義

ただいま御紹介にあずかりました田中です。紹介の労をとっていただいたことに対しまして、西暦900年頃に詠まれた和歌で、返礼した

1) 町野研究科長には私が担当してきた授業科目などを紹介していただいたあと、元大学院生に対する私が主査となった博士学位論文審査の件や2009年9月4日に開催された嶺南大学校商経大学とのJoint Seminarのあとの歓迎会(サッポロビール園)の席上での私の韓国語によるスピーチの事にも言及され、また町野氏の出身高校が鹿児島県であることから、勤務後の帰宅途上の偶然の同道中に、北海道開拓と薩摩藩との因縁話をした事についても回想された。記して、謝意を表したい。平時、町野氏とは帰宅途上的一天、薩摩富士(開聞岳)について話し合った懐かしい記憶がある。

と思います。

見わたせば／柳桜をこきまぜて／都ぞ春の
／錦なるかな(延喜年間、素性法師)

そこでいわれている都は残念というべきか「都ぞ弥生」の札幌では無論なく京の都でありまして、京都はわたくしにとって亡兄との関係で思い出があります。予想をはるかに上回る人数の方々がおられます。少し品が下がる表現ですが、こいつあ春から延喜[縁起]がいわえ、ということになろうかと思います。

それはそれとして、この場の皆さんが貴重な時間を割いて、わたくしの最後の講義を聴きにきて下さって、有り難う。

最終講義では板書をしている時間は無いはずですし、言い忘れたことがあっても次回の講義で話すというわけにもいきません。そこで、私は手元に口述原稿を用意しました。

なお、皆さんに、なるべく正確に講義内容をお伝えするために、同じ口述原稿をお渡ししておきました。そして、この口述原稿は、ほぼそのままの形で、北大の紀要『経済学研究』に掲載していただきたく希望いたします。研究科長をはじめ、ご来席いただいた教授会メンバー各位に、紀要への掲載許可を、この場で要望いたしておきますので、よろしくご高配をお願いいたします。第60巻第1号には、もう間に合わないでしょうから、第60巻第2号以降に掲載していただければ有り難い。巻頭論文になどはめっそうもなく、一番おわりで結構です。そうしていただかないと、この口述原稿はもう陽の目をみることはありますまい。この口述原稿に今少しばかりの間わずかな命²⁾を、お与えくださるよう願います。

最終講義は午後4時で終えることになっていますから、多分この原稿を全部は読み切れなんでしょう。ところどころ飛ばすことになるかもしれませんが、実質的には話した、というように御理解いただきたいと思います。また、この

原稿を読み上げるだけでは趣向に欠けましようから、所々、ad libが入るかもしれませんが、この点もご了承ください。

さて、いま現在、私のような者でも、Ecce Homo³⁾ (“Behold, the man” on John 19-5 in the

2) 初めに言葉があった。すべてのものは、これによってできた。この言葉に命があった。そしてこの言葉は人(私)の光であった。(「ヨハネによる福音書」第1章、参照) 因みに、英訳 wormwood (邦訳にがよもぎ) という言葉が「ヨハネの黙示録」第8章にでてくる。第三の御使が吹き鳴らしたラッパを合図に、空から落ちて来た松明のように燃えている大きな星の名前のことである。その苦よもぎが水を汚し、多くの人が死ぬという預言である。なお、ロシア語で苦よもぎのことをチェルノブイリという(新共同訳佐藤優解説『新訳聖書 II』文春新書、2010年、358頁)。万が一、この合致が偶然でない場合、論理上は David Herbert Lawrence (1885-1930) のアポカリプス論が祖上に載せられる。

3) ニーチェについては Maximilian A. Mügge, *Friedrich Nietzsche* (London, Edinburgh and New York, n.d.) を読んでいたらしい内村鑑三は、1916年12月26日に弟子の一人からニーチェの影響による棄教の告白を受けたのち3日後の12月29日に Daniel Halévy, *The Life of Friedrich Nietzsche*, Translated by J.M. Hone (London, 1911, reprinted 1914) という伝記の英訳本を購入して、自己の警備のためにもある程度詳しくニーチェを知らんとした(『内村鑑三全集』第23巻、岩波書店、1982年、462-463頁)。その結果、1917年2月に発表した①「ニーチェ伝を読みて」で、「多分近代に現はれたる最大の天才であらう」と評しつつ平民的思想が欠如した「ニーチェの一生は積木を弄ぶ小児のそれであつた、彼の思想上の貢献は差引き零であつた、残りし者は強烈なる意志であつた、然り、意志と謂はんよりは寧ろ『我』であつた」と評した(同書、所収、196-198頁)。つぎに、1917年2月に購入してすぐに面白く読んだ哲学に関する書籍の Henri Lichtenberger, *The Gospel of Superman: The Philosophy of Friedrich Nietzsche*, Translated by J.M. Kennedy (Edinburgh and London, 1910) を参考にして翌3月に発表した②「イエスと超人 ニーチェ研究の一節」で、ニーチェは近代の思想家の代表としてキリスト教に憐れみを唱える宗教を見てイエスにあきたらず別に超人の出現を唱えたが「誰か知らんイエスが真の超人なることを」と超人概念を逆手にとり、「西洋の哲学者にして未だ曾て基督教以上の真理を説

きし者あるなし 又直接又は間接に斯教に負ふ所なき者あるなし、ニイチェの超人説亦然り、牧師の子とし……て生れしニイチェにして始めて超人を唱ふるを得しなり」、とニーチェにおけるキリスト教的要素を論じた(同書、207-208頁)。さらに、宗教改革の記念事業らしいルーテル記念会における演説にもとづき1917年12月に発表した③「ルーテルとニイチェ」で、まず「二者共に熱誠で勢力家で簡潔にして強烈なる獨逸語を操つるに長じて居た」こと、後世への影響力の大きなことで外見的にはよく似ていたとする。そして、「第二のキリスト(Antichrist)を以て任ぜしニイチェ」をドイツの哲学者として仰いだドイツ人は今回の軍事行動にでたが、「神は今猶獨逸人を愛し給ふ、而して愛の鞭として此大戦争が彼等に臨んだ」のであって、「獨逸はニイチェを師として亡びざるを得ないのである」し、「ニイチェは自己の擔ひし重荷に堪へずして早く仆れた」ではないかと論じた(同書、426-429頁)。そして、1917年12月31日にFriedrich Nietzsche, *The Twilight of the Idols; The Antichrist; Notes to Zarathustra, and Eternal Recurrence*, Translated by Anthony M. Ludovici (Edinburgh and London, 1911)を購入した(同書、464頁)。ニーチェ晩年の重要な著作を英訳本で大晦日に求めたほどで、なかでも『反キリスト者』には興味津々だったにちがいないが、なぜか、これを読んだ上で論評は書かれなかった。なお、内村の弟子にまでニーチェの感化力が及んでいたのには、生田長江(1882-1936)による訳業(1909年5月に翻訳開始し森鷗外宅に度々推参して難解な箇所を教えてもらうまでして1911年1月に刊行した『ツァラトゥストラ』、3月『ニイチェ語録』刊行、1915年『ニイチェ全集』の訳出計画、1916年『ニイチェ全集』第1巻刊行、1929年『ニイチェ全集』全12巻、完結)の社会的影響力があったであろう(『日本現代文学全集』46、講談社、1967年、411頁、418頁、425-430頁)。

ドイツ語の文献を原書で読むのが難しいため英訳書で理解しようとしてきた(その成果は例えば、宗教や神の事である天を考える前に地に生まれ地産・殖産によって生きられたのち死んで地に帰っていくのだから地の理を学ぶことを考察した『地理学考』1894年、のち『地人論』1897年と改題、となってあらわれている)内村の同様の努力が伺われる。本当はドイツ語の原書で読みたかったのであるが、英訳書でも立ち向かったところに内村の偉さがある。ルターを生み、英語に劣らず偉大なドイツ語に対する内村の願望は1911年に府立中学志望の嫡男祐之をあえて独逸学協会学校中学に入学させたほどで、その間

の事情は「英訳でカントなどを学ばねばならなかった自分の齒がゆさを息子には味わわせたくないという親ごころであったかとも思う。」と回想されている(内村祐之『鑑三・野球・精神医学』日本経済新聞社、1973年、30-32頁)。因みに、この親子はよく将棋で対戦し、祐之をいつもの得意技で盤上の隅に追い込むや鑑三は妻に、おまえの息子は雪隠詰めになったぞ!、と喝采をあげたという。

ともかく、ニーチェに関する英書を少なくとも4冊は購求して直ちに読んでいたらしい内村がニーチェに並々ならぬ関心を寄せていたことは明らかである。ニーチェのキリスト教批判とその影響力に無関心たりえなかった。むしろ内村はニーチェを批判するのだが、意外なことに、内村に対する回想文のなかには、内村とニーチェの類似性を指摘したものがあったと記憶する。二人の風貌が似ているとか、内村にはニーチェ以上のところがある云々。このニーチェ以上が具体的は何をさすのか明瞭ではないが、両者が書き残した文章の迫力という共通点で、その文体のもつ迫真性において内村がニーチェに優るのではないか、という意味ではなかろうか。「同氏[内村]の信仰には同感出来ない点が多く、同氏がキリスト教徒でなかったら、どんなに偉い文豪になったろうと、それを残念に思った。内村さんの信仰の頑固さを惜しんだ。」(『武者小路実篤選集』第8巻、青銅社、1964年、439頁)との評言もある。が、キリスト教文学としては世界屈指であろう。例えば、韓国の高名なクリスチャンに「私[咸錫憲 1901-1989]は、たまには、我々が日本に三十六年間奴隷のくらしをしたとしても、すくなくとも私にとっては、内村(との出会い)一つを以てしても、交換してなお、おつりがあると思ったりもします。」とまで評されている(亓亨均訳『ハム・ソクホンせいどくシリーズ 1 神の足に蹴られて、他二篇』伯裁文化社、1994年、31-32頁)。内村その人が、ただ一人で韓国植民地支配の贖罪を担いうるほどの代表的日本人になっているわけである。驚くべきことでなければならぬ。それを読む人を説得する力としての文体という問題があるように思われる。韓国のクエーカーの代表的人物である亓亨均氏は大学「卒業後には、内村全集の韓国語訳を思い立ったことがあったが、内村のあの力強い靈感あふる文章に当たる韓国文の文体は一体何なのか、という問いにぶつかり、[中略]途中で筆を折った経験がある。」と回想されている(同書、119-120頁)。そうした文体と共に内村には弁舌力の卓越性があったもののようである。内村祐之夫人は往時を回想し

て「私は父を、日本で出た最高級の雄弁家の一人ではなかったかと今でも思っています。」と語っている(内村美代子『内村鑑三の日常生活(三)』『内村鑑三全集月報』22, 1982年7月, 所収, 2頁)。そうだったのであろう, こういう評価をする人はいく人もいたからである。ほとんどそれは絶賛に近いほどである。内村祐之を恩師とする精神医学者はエリクソンによるルター分析にならって, 内村鑑三をパウロ・アウグスチヌス・ルター・パスカル・キルケゴール・ボンヘッファーと並べ, キリスト教思想家としての比較分析を試みており, 内村を日本のインテリにとっての一種の父親的人物となった, と評している(土居健郎『信仰と「甘え」』春秋社, 1990年, 94-102頁)。その父性とは日本社会に対する幻滅観からの克己力のための精神的支柱であるにちがいない。徳富蘇峰ですら内村の天才に羨望したほどだし, シニカルな正宗白鳥や辛辣な中野好夫も内村の迫力にはお手上げだ。その迫力をより男性的たらしめたのは, 内村の先祖伝来の田舎侍的な儒学的精神力と, 内村の米国での流竄の日々で体得した禁欲的な清教徒精神との幸福な結合であろう。内村の独立精神の魅力の一つは, 集団の誘惑と圧力で一度入りこんだ以上かたんには抜けがなくなった(日本的な義理人情の掟もあって)イデオロギー信仰的な集団(同志的紐帯という心情倫理)からの心理的自立のための離脱力なのであろう。

さて, このようにニーチェが第2のキリストと自認していたとまで内村は理解していたのだから, 私は内村がこのラテン語起源の Ecce Homo をどう論評しているか, 気にかかり少し調べてみたが, この一句に対して1926年4月に発表した「ピラトの前のキリスト」でも, 内村は関心を寄せていない(『内村鑑三全集』第5巻, 岩波書店, 1932年, 717-718頁, 765頁)。ただ, ピラトの問いかけに対するキリストの返答について, 若き志賀直哉(1900-1907年, 数え年で18-25歳, 内村の門下生だった頃を「よからぬ弟子」だったと, 1941年懐かしそうに書いています)が聴いた聖書講話で内村は, こういう場合最も大事なことは「然り」または「否」の一言で返事する二者択一しかないのだ, と話したという。また同じ頃, 「教員といふものは馬の寄合ひのやうなものだ」とも言った内村の真意を, 志賀は「直ぐ蹴り合ひを始めるといふやうな意味だったか」と回想している。(『内村鑑三先生の憶ひ出』1941年, 『志賀直哉全集』第9巻, 岩波書店, 1955年, 217頁)

なお, ここで内村の名を出したので関説する。内村のクラーク評からは重大な意味が読み取れるからである。その決定的と思われるもの

は1925年に書かれた次の一節である—「私は日本に於てはクラーク先生に接しなかった。然れども米國に在る間[1884-88年の3年半]に二回、先生を其家に訪問した。其時私は先生より多くの興味ある先生の實驗談を聞いた。然れども信仰の事に就ては教へられなかった。先生は私の訪問を喜んで呉れた。然し乍ら御自身に私を教へた事のなき先生は、教師の態度を以つて私に臨まなかった。私は米國に在留中、心竊に先生の援助を期したりと雖も、先生は其時既に援助を他に供し得る地位に於てなかった。反つて私より先生に奉仕せねばならぬ境遇に於て在られた。先生は私の米國に在留中に永眠せられた。然かも先生の舊友中、一人も公然立て先生の功績を述べて遺族を慰むる者がなかった。私は堪え難く思ひ、廻らぬペンを執り、日本に於ける先生の事業を列記し、之を『アウトルック』誌に投書して米國の社會に先生の爲に辨護する所があった。然るに何ぞ計らん私は讀者より激烈なる反対を受け、其答辨に困みし程であつた。先生が其終焉に際し、米國に於て如何に失意の地位に在りし乎は、此一事に由て見て明かである。實にお氣の毒の次第であつた。」(『内村鑑三著作集』第1巻, 岩波書店, 1953年, 397-398頁)。対米コンプレックスの深層心理に培養された幻想のクラーク教への惑溺から目覚めて実証批判精神に立つべきである。クラーク関係の画像はクラークの Ecce Homo であるから、歴代の北大のトップは総督ピラト役を演じてきたことになるのではないか。クラーク関係の画像はなるべく早めにやめた方がよいであろう。歴史の不勉強を公にさらしていることになるのではないだろうか。

なお, 1894年7月の講演で内村が語ったクラーク(『内村鑑三著作集』第16巻, 360頁)と, この1925年に書いたクラーク, との落差には目をみはるものがある。帰国後6年の前者ではクラーク晩年の落魄を知りつつも時期尚早, と伏せざるをえなかったのではないか。むしろ, 死後数年にすぎないクラークの名誉挽回のために, かなり皮肉を交えつつも彼の最大長所らしきものを伝えたのであった。それはクラークに対する最大限の賛辞であつたにちがいない。しかし, 排日移民法(1924年5月15日, 米議会在が排日条項を含む新移民法を可決)のあとの後者では唯一の証言者として立ち現れたのであった。しかも, 愛の人として内村はクラーク鎮魂の筆をふるったのではないか。誠に, 「この最も美事だつた明治の精神界の戦士の文章は、その強烈な破壊力の中に人柄のあたゝかさを示して、目にさへあざやかである。」(保田與重郎『明治の精神』『文芸』1937年2月号, 筑摩書房版『近代日本

New Testament)の時が来たわけであります。
キリスト教を排撃した Nietzsche も皮肉なこと

に、この言葉が余程好きだったらしく晩年の本の書名⁴⁾にまでしています。そのなかで自画自

思想大系36 昭和思想集II]1978年、所収、279頁)

因みに、クラークがその短い札幌滞在中に如何なる学問的影響を残したかについては以前から疑問視されていて、例えば東畑精一は1960年に発表した「マクス・フェスカの日本農業論」で、クラークはせいぜい例のボーイズ〜と教えた以外に何事も伝えられいず、しかもこのボーイズ〜が、伝えられているような大きな影響を日本青年に与えたか否かは、誇張としか受けとられないような記事があると思う、と書いている(『農書に歴史あり』家の光協会、1973年、所収、106頁)。図星であろう。東畑が参照を求めている典拠を見ると、その「農業関係備外人一覧」には英人5名、独人16名、米人5名、仏人1名、瑞西人1名、蘭人1名、清人5名が出ているが、クラークは出てこないから(農林省農務局編『明治前期勸農事蹟輯録』上巻、大日本農会、1939年、541-544頁)、この箇所のかぎりでは東畑が疑念を抱いたのも無理はない。しかし「開拓使、札幌農学校関係ノモノニツキテハ附録第六参照ノコト」(同書、543頁)とあるのだから、この「附録第六 開拓使ノ農事施設」の方も見ると、札幌農学校沿革の箇所では明治9年7月に農校教頭クラークと農校土木等教師ホイーラーと農校化学本草教師ペンハローの3人が札幌に来たことと、開拓使雇外国人職員表の箇所ではクラークは雇入が明治9年5月20日で解雇が明治10年5月21日で年給が金7200円と記されていることだけであるから(前掲『明治前期勸農事蹟輯録』下巻、1803-1804頁)、東畑の疑問は変わりようがない。なお、この年給額は当時の金本位制下の日本円金貨で7200円だから、現在の貨幣価値だと、仮に少なく見積って1円金貨=日本銀行券2万円 で換算すると、1億4400万円になる。因みに、クラークと同時に雇入の他の2人はホイーラーが当初の年給・金3000円で明治12年12月17日に解雇、ペンハローが当初の年給・金2500円で明治13年8月2日に解雇されたが、2人とも妻を帯同していたから、クラークとは教師としての意気込みが初めから異なっていた。クラークには札幌での仕事に腰掛け程度の気持ちが幾分かあり、実質的なことは教え子にあたりまだ20歳代の2人(北海道大学編『北大百年史 通説』株式会社ぎょうせい、1982年、32頁、参照。なお、本書と前掲『明治前期勸農事蹟輯録』下巻とでは3人の解雇日が違っている。本書は手軽に見れるが、前掲書はそうでないから、ここでは比較のためにも前掲書に出ている日に

ちの方を記載しておいた)に託していたのではないかと推測すら出来そうである。

こうした東畑の疑問を知っていたかどうかは分からないが、前掲『北大百年史 通説』は札幌でのクラークの事績をようやくほぼ全面的に明らかにしたものであろう。高給の教頭(President)であるからにはそれ相応の仕事をしてもらわねばならなかった。大体において、自分が学長をしていたマサチューセッツ農科大学(Massachusetts Agricultural College)の制度的移転をSapporo Agricultural Collegeと表現した学校にほどこしたにすぎず、自分独自の学問的成果を異国に伝播したわけでも、また北海道に腰を落ち着けて研究をしたわけでもなかったのである。東畑の問題提起は依然として生きているし、その疑念は氷解していないだろう。そもそも、2年は就任してもらわねばならないという日本側の要求に応じず、1年契約(その1年には着任までの渡航時間や帰国所要時間も含まれているのだから、単身赴任での海外旅行気分もあったのではないかと推測すら生まれかねない)で十分と見なしたばかりか、ようやく1876年7月31日(その2週間後の8月14日に札幌農学校開校式)に到着した札幌を8か月半後の1877年4月16日に去ったのち長崎にまで旅行していたのだから、日本を甘く見ていたと評されても仕方あるまい。少なくとも腰を落ち着けて本気で取り組んだか疑わしくなる。その程度の人物だったのではないか。クラーク伝説たるゆえんであり、クラークという偶像の黄昏が早晚訪れるのは時間の問題であるが、いっそうの問題はクラークその人の実像いかんというよりも、その虚像が通念として我が国に流布してしまった背景で、現代日本の軍事的・文化的な対米隷属的側面が諸個人の無自覚のままに社会意識内定着をはたしたものであろう。アメリカ人教師だからといって、ことさらに有り難がる依存心は病巣ではないだろうか。対米戦争敗北後、皇太子の家庭教師にアメリカ人女性になったことや昭和天皇の親米的傾斜(豊下楯彦『安保条約の成立』岩波新書、1996年、参照)の心理的影響も増幅効果になったかもしれない。

- 4) 邦訳『この人を見よ』は十代後半に読んで若さのままに感激し、30歳代に手塚富雄訳(岩波文庫)と川原栄峰訳(講談社文庫)を読み比べて、異なる翻訳からくる読後感の違いを味わいつつ、後者の解説が参考になって、感銘を新たにしたり記憶がある。

贅をさんざん、しかも見事にやっているわけですが、凡人の私も下手な真似をして少々自画自賛をすることになるでしょう。つまり、私の論文を解説する人間は未来永劫でてこないのだから、自己解説するしかない、というわけであり、そこには自己責任、説明責任という意味合いもあります。

これから、まず、小子後生の「学問」的過程を話させていただくことになりますが、日本人はつつましいことを美德といたしますから、おはこをだすな、と戒めてきました。得意がって話すなということですが、今日は残念ながら私はおはこをださざるをえないことになります。それで、私が研究と称してやってきたことが学問かどうか、残念ながら自信が無い。むしろ100%自信が無いわけではありません。Half and halfといったところでしょうか。それでカッコ付きになっていることをお含みください。学んで問うたことは事実ですから、羊頭狗肉にはならないはずであります。

お配りしてある抜刷⁵⁾のA4サイズの複写物、これも一種の自画自賛でアラビア数字の127頁から156頁までの30頁分と小文字のローマ数字のi・ii・iii・iv頁の4頁分とからなりますが、これを時々見ていただくことになります。見やすいように拡大コピーしてあります。以下これを、A4サイズ抜刷、ということにします。

私は昨年(2009年)10月17日、出国して、韓国のソウルに行き、30日に帰国、13泊14日の日程でありました。まず、10月19日、延世大学の尹起重名誉教授⁶⁾(1931年のお生まれ、78

歳。韓国学術院会員)にお会いしました。北海道大学経済学部と延世大学校商経大学とのジョイントセミナーで私が報告(iv頁の5、参照)した時に司会をしてくださった方です。つぎに、10月20日、ソウル大学の安秉直名誉教授⁷⁾(1936年のお生まれ、73歳。實学博物館館長)にお会いしました。私がソウル大学校社会科学大学に短期滞在(i頁の在外研究員、参照)した時に受入教授になっていただいた方です。ソウル大学では奎章閣で史料を閲覧しましたが(10月27日・28日)、これについては後でまた述べます。なお、10月28日、尹起重名誉教授にご案内いただき延世大学校商経大学の学長室を表敬訪問し朴泰圭学長に面会した際、町野研究科長からの伝言をおつたえした。

韓国は歴史的に小中華思想の国。礼を重んじるお国柄です。韓国へのお土産は相手が男性なら日本の清酒が喜ばれるようです。韓国のデパートで見たかぎりでは大体4倍の値段になっているようでした。日本の清酒に対する評価は日本刀に対する評価と相通ずるものがあるようです。日本の特徴を、アメリカ人が「菊と刀」というなら、韓国人は「日本酒と日本刀」というのかもしれません。秋水という言葉もあるわけですが。

帰国して11月から書き始めたのが、A4サイズ抜刷のなかの「明治初年の大名屋敷をめぐる都市肥料経済」です。これが最終講義のタイトルになるはずでした。文字通り拙速によるもので、5日前に活字として公刊されたばかりです。掉尾を飾るという言葉がありますが、第59巻第4号の掉尾を首尾よく飾れましたかどうか、皆さんのご批判にゆだねたいと思います。いちおう論文の形式(形式的なる表現手段⁸⁾)はとっていますから、これを読み上げる

5) 田中愼一「明治初年の大名屋敷をめぐる都市肥料経済」,「略歴」,「研究業績」『経済学研究』(北海道大学)第59巻第4号(2010年3月)127-156頁, i頁, ii-iv頁。以下、文中で指示することがあるから、必要とされる場合は当該箇所を参照のこと。

6) 私に対して、白南雲『朝鮮社会経済史』や朝鮮史編修会編『朝鮮史』全37冊を話題とされたことが印象深い。ペンという発音が忘れ難い。

7) 私に対して、「人情米」や白コグマを話題とされたことが印象深い。後日、その人情米を朝鮮総督府中枢院『朝鮮田制考』に見出し、感慨を覚えた。人情米と発音された時の笑顔が忘れ難い。

わけにもいきません。今日は時間に余裕が御座いましたら、私がこの論文を書いたことを一つの結果として、その原因を説明するという、いわゆる因果連関を述べることになりましょう(実質的な表現意欲⁹⁾)、さらにこの論文執筆の舞台裏のようなことを述べることになりましょう。時間切れで、その説明などをしなかったとしても、この抜刷をお読みいただければ、私が何に、どう取り組んだかは、お分かりいただけるものと思います。

そういうわけで、今日のタイトルは「社会経済史雑考」としました。私の大学院担当科目は社会経済史でありますから、それに関する雑考、つまり粗雑な、かつ雑白な考察、という意味であります。また、皆さんの耳には整然としてではなく、雑然とした印象を受けることになるかもしれないという含みもあります。以下、です・ます調と、である調のまざりあった表現となりますことを、おことわりしておきます。

私が社会経済史にふれたのは1967年秋、2年生対象の経済史という松田智雄教授の講義でした。2年間の教養学部時代でおもしろかった授業はソボクレス『オイディプス王』¹⁰⁾の英訳本やGeorge Orwell¹¹⁾, *Animal Farm, a Fairy Story* (Complete and Unabridged, Nan'un-do, 1964)

を読んだ英語の授業(後年、これらをテキストに選ばれた英語の下村先生には敬意を表せざるをえなかった)と、この経済史という講義でありました。参考文献とされた『西洋経済史講義——封建制から資本主義への移行——』I [封建制の経済的基礎](岩波書店, 1960年第1刷, 1967年7月第8刷)の「総説」には講義の内容が書かれていた。この本を買い、ほとんど全部読みましたが、なかでも大塚久雄教授の「緒言」という巻頭論文は特に精読し、経済史というのはこういうことを研究するのか、と感心しました。その論文に出てきていた「アジア的生産様式」という概念に赤線を引いたのですが、後年、自分がこれを正面にすえて論文(ii頁の12・13, 29, 参照)を書くようになるとは夢にも思わなかったことでした。

同じ秋、大塚名誉教授の1回きりの特別講義があると知り、わざわざ経済学部まで聴きに行っただけです。その講義の一節は今でも覚えていられるほどです。その話術は魔術Zaubereiの如く陶酔的でした(後でその手の魔術からの

8, 9) マックス・ウェーバー『経済史』(1923年)の「経済史の性質」の節に、「芸術においては『古典的』芸術と『非古典的』芸術との対立があるが、この対立は究極において、実質的な表現意欲が形式的な表現手段に満足しえざることから生じた相剋である。」とある(黒正巖・青山秀夫訳『一般社会経済史要論』上巻, 岩波書店, 1954年, 56頁)。

10) ギリシア悲劇の最高傑作という定評がある。犯人さがしという過程が一つ一つ疑問を解いていく実証の積み重ねであり、しかも謎は狭まりつつも深まっていき、その果てが意外な事実の意味を見いだすことになったという劇的效果をもち、経験科学の方法に通じるものがある。なお、フロイトによるオイディプス(エディプス)コンプレックスという用語は誤解されやすく、フロイト攻撃の格好の標的となった。

11) オーウェルはエッセイ「なぜ書くか」(Why I Write, 1946)で、作家が散文を書く場合の動機を四つあげている—①純然たるエゴイズム(頭が良いと思われたい、有名になりたい、死後に名声を残したい、子供の頃に自分をいじめた連中を大人になって見返してやる。自己中心的な虚栄心で人生を貫徹しようとする才能のある強情な人間)、②美への情熱(世界のなかの美的なものや言葉の排列に対する感受性。すぐれた散文の緻密強靱な構成やリズムを楽しむ心。自分が貴重で見逃せないと思う経験的事実を伝えたいという欲求。総じて美的な関心)、③歴史的衝動(物事の真相をたしかめて後世に残しておきたいという欲望)、④広い意味での良き政治的目的(社会観に変化をもたらす啓蒙的な欲求)、(小野寺健編訳『オーウェル評論集』岩波文庫, 1982年, 11-13頁)。優れた作家だけに、業績をあげることに汲々となりがちな研究者とは次元を異にする高級なものがある。作家のような真の力仕事ではなく、せいぜい「学術的」論文を少々書くにすぎないように、このエッセイを読み、省察せざるをえなかった。

解放や陶酔からの覚醒が必要になる)。当時、『社会科学の方法』(岩波新書, 1966年第1刷, 1967年1月第3刷)が刊行されたばかりでした。郷里の父が定期購読していた『週刊朝日』に「巨匠の至芸」(普通これは芸術家のことだと考えていたが, 社会科学にもありうることを感じた)と書評が出ていたこの本はよく読み, 後年, 演習のテキストにしたこともあったし, また石坂昭雄教授記念号に書いた論文(iii頁の31, 参照)のヒントの一つになったのです。

さて, 2学年の冬に, ゼミナールを選択することになり, 石井寛治助教授(1938年のお生まれ, 当時29歳。現在, 日本学士院会員)の日本経済史演習を希望しました。希望者は山田盛太郎『日本資本主義分析』(岩波書店, 1934年第1刷, 1967年5月第17刷)のレポートを書いて出すことになったので, 1週間ほどかけて読破しました。1968年4月から始まった演習はテキストがこの本, そのあと井上晴丸・宇佐美誠次郎『危機における日本資本主義の構造』(岩波書店, 1951年第1刷, 1967年11月第13刷), 井上清『日本帝国主義の形成』(岩波書店, 日本歴史叢書, 1968年12月第1刷)と続くことになった。ほとんど大学紛争の渦中にあった。学生は大体が勝手気ままにやっていたにしろ, 当時の大学の先生は苦勞されたはずである。紛争は大学院時代にまで持ち越される始末であった。

ゼミナール担当者が正面教師になるか, 反面教師になるか(むろん聖人でないかぎり普通は両面性があるものであろう)の一つのリトマス試験紙はその演習テキストと, その解説と, 学生に対して一神教的か多神教的かどちらの態度をとる傾向にあるか, であろうと後年考える得難い経験となった。若者はいわば白いカンパスだから, どんな絵の具を塗られるかは極端に言えば運命的であり, 塗られたままでいるか, 塗られた上に大なり小なり加筆するか, 塗られたものを自分で洗い落として今度は自分が選んだ色彩で自由に描いていくか, 最終的には本人の

責任になり, また自力本願の問題にもなってくる。

それにしても, 不勉強な私が大学院に進学できたのは石井寛治先生の御蔭であったと思わざるをえない。ゼミナールの指導教授が不可避免的に持たざるをえない良きにつけ悪きにつけ支配力とはそういうものでありましょう。感謝にたえない。なお, 松田智雄教授は大学院入試の口述試験で試験委員の司会をなさっていて, 私に就職のことを質問された。就職活動をしたか, その結果はどうであったか。就職の内定はいただきました, とお答えすると, さらに何という会社ですかと質問されたので, 三菱化成ですとお答えし, 大学院進学のため就職内定をすでに辞退しましたとお答えすると, 松田教授はほほ笑んでおられました(今になって推測するに, この男は落とせないと思われたのかもしれない)。私の平凡な人生にも, そういうことがあったのです¹²⁾。

12) 私が研究者の道に進んだのは誤ったうぬぼれであり間違った職業選択ではなかったかとの自戒の念を深めるようになったのは, 柳田國男が1941年に東京帝国大学全学会教養部の特殊講義で講演したもののなかの次の一節を読んだからである—「学者は人の師とも仰がるべき立派な地位であつたが故に、其修業の苦しさも他の諸職とは比べものにならなかつた。以前の学者は暗記の部分が多く、又読まなければならぬものが東洋では無やみに多くて、非常に沢山の時を要したのである。是に適するだけの天分の入用なことは言ふまでも無い。其上になほ大へんな努力勉強、是に堪へるだけの根気と体質とを要し、従つて出来そこなひが幾らもあつた。資力の有る者には却つて此難関は押し切れなかつたらう。」(『日本の祭』1942年, 『定本柳田國男集』第10巻, 筑摩書房, 1962年, 所収, 167頁)。文中の「出来そこなひ」でドキッと、「幾らもあつた」でやや安堵した。それに続く、資力と難関との緊張関係には流石は柳田と痛感した。そして、それぞれの子供の気質に応じて資金がなくとも始められる職業のうち学者修業が新しくまた高尚なものの一つのだが(他には医者や坊主)これには適しない者が非常に多い(同書, 166頁), には柳田の自己投影を見, かつ同感した。これ

さて、私はこの3冊の学部演習テキストに共通するものは何かと自問し、それは植民地朝鮮問題であると見定めた。こう見定めたのが私の人生の失敗であったかもしれないが、それはともかく、具体的には朝鮮土地調査事業を中心とする朝鮮の植民地農業政策や土地問題に着目した。日本でいえば、地租改正のような歴史的位にある土地制度史上の画期と考えられたからである。日本の地租改正の研究の多さに比べて、朝鮮土地調査事業の研究の少なさ、かつて日本が実施主体であったにもかかわらず、日本人による研究が無いことが意外であった。そこには何かあるかと直感したといってもよい。朝鮮土地調査事業に関心をもったのには大学院1年で安良城盛昭助教授の演習を履修したことも影響している。安良城先生は太閤検地研究の第1人者であったからである。

前近代社会や近代社会初期においては、富の最大の源泉は土地であるから、国家的事業として土地を全国的に調査することが必要になる。それを日本が朝鮮の地で実施したのだから、その社会経済史的意義を考察することは日本人の誰かがやるべきではないかと感じた。しかし、研究の行く手には巨大な壁があることが分かってくるのである。1971年の春、東京大学大学院人文科学研究科の掲示板に武田幸男助教授担当の東洋史学(朝鮮史)演習開講を見出した私は、修士課程2年から武田先生の大学院演習に参加した。そのとき学生は私一人であった。経済学研究科所属の異質な学生を先生は暖かく迎えてくださった。その学恩に感謝せざるをえない。この演習でハンゲルの文献を読むことになったのである。なお、武田先生は北海道大学

文学部東洋史学の助教授から東大文学部に、もどってこられたばかりであった¹³⁾。北大時代のこととはほとんど語られなかったが、寒さでふるえあがるような真冬の話がされたことがあり、「内地」とは隔絶した風土を想像した。その北海道大学に自分が赴任することになるとは当時、夢想だにしなかった。

私が大学院時代から始めた朝鮮土地調査事業の研究のために、私は韓国財政整理に始まる7篇の論文(ii頁の1~7、参照)と後年の2篇の辞典項目(iv頁の3, 9、参照)を書くことになった。なお、先程、昨年10月下旬にソウル大学の奎章閣に行くと話しましたが、そこには私が最初の活字論文を書いた韓国財政整理に関する一次史料があり、それを閲覧したいがためであったのです。研究生活を始めた当初に書いた論文は忘れ難い。あたかも中学時代¹⁴⁾に好きになった異性が忘れ難いごとくに。

さて、そして、北海道大学に赴任することになったのですが、事前の挨拶のため初めて渡した1978年12月に長岡新吉先生が私を北海道

13) 武田幸男編『朝鮮社会の史的展開と東アジア』(山川出版社, 1997年)565頁。

14) 因州藩家老箕浦家表門の校門と桜・からたち・楠などの木々をもつ広々とした校庭があった中学校で、大谷田鶴子先生は国語の授業で日本文学史を教えてくださいました。また、音楽の授業で太中先生がベートーヴェンの交響曲をレコードで一度だけ聴かせてくださいました。初めてなので構成要素的に流動していく音の構造までは分らなかったが、何か尋常ならざる時間芸術の構築物のように感じられた。なみだなきわれをかなしむきみゆくも。いにしへのことはしらぬをわれみてもひさしくなりぬひさまつのやま。若い頃が懐しくなる気持ちを内村鑑三も1917年12月に発表した「余の今年の読書」で、例えば次のような形で書いている―「A・ミーク著『魚類移転論』は余をして再び青年時代に若返らしめた、余が天然学を抛棄して以来茲に三十年、胸に溢る、平康は余を駆りて再び天然に帰らしめ、茲に旧時の専門を手にして錦を故郷に衣の感がした。」(前掲『内村鑑三全集』第23巻, 438頁)鮭などの回帰魚類ほどの天然の偉大さはないが、人間にも帰巢本能的なものがあるのであろう。

を読むと、いま現在ではアナクロニズムになるのかもしれないが、当時はおそらくこうであった、もしくはこうあるべきであったという通念をもてたのであろう。隔世の感がするにしても、柳田にして出来た日本人の学者論としてこれは末長く残るであろうし、残らねばならぬものであろう。

大学百年史編集室に連れていかれ、その場で3月締め切りの原稿を約束することになった。ほとんど強制である。編集室には青山英幸氏と山田博司氏の両編集員がおられた(お二人はあとで北海道立文書館に勤務される)。北海道で初めて書き4月11日に提出した(ii頁の8)。すでに新学期の授業が始まっており、ほとんど準備のないまま講壇に立つことになったから、最大の被害者は当時の聴講学生だったことになる。新渡戸稲造については、1976年に書いた論文(ii頁の4)の註で引用し、矢内原忠雄の恩師として興味をもっており、全集も読んでいたからである。新渡戸については結局あわせて6篇の論文を書くことになった。

なお、北大百年史編集室から指定されて1981年に書いた論文は『北大百年史 通説』に掲載されたが(ii頁の11, 参照), その過程で勉強したことが後年、小林好宏教授記念号に書いた論文のなかの長い註の文章や事典項目(iv頁の6, 7, 10, 参照)を書くのに役立ったのであります。

ところで、札幌に来る前、東京大学の社会科学研究所の大石嘉一郎先生が指導教授になってくださった私の助手時代¹⁵⁾に始まった共同研究があった。岡山県の瀬戸内海に面する港町牛窓に、かつて朝鮮で農場経営をしていた企業家(西服部家)があり、その所蔵文書にもとづいて学術書を出版する計画が立てられており、私の

分担も決まっていたのです。

そのために私は岡山大学経済学部の坂本忠次教授に受入教官になっていただき内地研究員(i頁, 参照)として滞在することになり、分担の責任を果たしたつもりです(ii頁の17, 参照)。岡山大学経済学部では神立春樹教授とも交流を重ねた。10カ月の予定をギリギリ3月までの11カ月に延長することになる内地研究員の時、林善茂教授記念号に原稿を出さねばならないことになっておりました。北大農学部のご出身で北海道経済史を担当された林教授のために何を書けばよいか思案したのです。

まず、新渡戸をテーマにする案を考えました。ところが、札幌市教育委員会から新渡戸についての原稿依頼が来たため(ii頁の19, 参照), その案はなくなり、次の案として浮かんだのは韓国農業奨励組合であった。西服部家文書のなかに、この組合に関する史料があったからであるが、それにもとづいて論文を書くには当時の地元紙『岡山新報』を読む必要があると判断した。この組合に岡山県が補助金を出していたから、地元紙に組合関連記事が載っているはずだったからである。秋から岡山大学のマイクロリーダー室で人気のない夜に読み始めた。大体の時期を定めて組合の記事を探すという、まことに非効率な作業に入ったのでした。新聞のなかに韓国農業奨励組合の小見出しを追って行くうちに、奇妙に感じられる現象に出会うことになりました。明治39年(1906年)の新聞記事に以下のような小見出しがあったからです。

「糞尿酌取人集会」「市内糞尿と附近村落」「糞尿問題と決議」「糞尿問題」「糞尿紛議に就て」「糞尿問題に就て(愈難境)」「糞尿汲取人総集会(交渉破裂)」「糞尿問題(巡査尾行)」「糞尿問題彙報」「糞尿汲取事件」「糞尿問題評議員会」「糞尿問題市営協議会」「初市会開会(糞尿問題)」「糞尿汲取実施委員」「糞尿汲取実施委員会」「糞尿汲取実施委員調査」「糞尿汲取市営実施委員会」「糞尿紛議の仲裁」「糞尿仲裁中止」「肥料研究会(糞尿問題)」「糞尿会議」

15) 社研の助手となって満3年に近づいていた1978年3月、社研の所長をつとめておられた岡田与好教授から電話で、辞職願を書いて出すように、という意味のことを言われた。私には岡田所長の声が心なしかすまなさそうな響きがしたが、先生が任期3年の助手の気持をおもんばかって丁重な言葉づかいをされたのが忘れ難い。その後、大石嘉一郎先生が私のために大松でもうけてくださった歓送会で、岡田先生は、北大に行ったら北大の紀要に良い論文を書きなさい、と話された。頂戴したこのさとするような送別の言葉を、どこまでいかせたか自問しつつ私は今日まで忘れないように心掛けて来たつもりだ。

以上の小見出しはあくまでも一部ですが、こういった新聞記事の小見出しは無視すべきだと皆さんはお考えになるかもしれないけれど、私は興味をもたざるをえなかったのです。

その理由の一つは東京で学生生活を始めたころの体験にありました¹⁶⁾。

16) 1966年の4月の1カ月間、下宿がないので、緊急避難的に大学の学生寮に仮宿させてもらっていましたが、あるとき水洗便所の水が止まったのです。水が出ない水洗トイレ、しかもそれを使わざるをえないと、どういう状態になるか、これは皆さんにも簡単に想像していただけるでしょう。その後、学生寮を追い出される形で、杉並区の西荻窪の3畳の下宿に移ったのですが、困ることが一つあって、1年未満で引越すことになりました。その下宿のトイレは小と大が一緒になっていたのです。そのために、下の方でだんだんたまってくると、はねあがってくることがあったからです。私は新聞紙を持ち込みました。読むためではなく、それでふせごうとしたのです。ともかく気持ちがいとはならないのでありました。東京には、ずいぶん文化水準が低い地域があると思ったものでした。

井伏鱒二は1927年に荻窪の麦畑の農家から借地(坪7銭)して家を建てることにした際、敷金のことをきくと、そんなことよりも後架の下肥は他に譲らぬ契約をしてくれ、と言われたという(『荻窪風土記』新潮社、1982年、19頁)。

ここで井伏が書いている後架という表現から連想して思い出すのは、夏目漱石の小説『坊ちゃん』の初めの方で、清という下女が呉れた壺円札3枚の「三円を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行つたら、すばりと後架の中へ落して仕舞つた。」に始まるくだりである。清に対する主人公の愛情(おそらくは特定の老女に夏目金之助がいだいた愛着の反映)がユーモアをもって語られているだろう。その壺円札には「明治17(1884)年9月に発行された日本銀行券。銀貨準備銀行券とされ、換券であったから、銀貨と交換することが出来た。」との注解がある(『漱石全集』第2巻、岩波書店、1994年、448頁)。大体そうなのだが、正確には1884年5月に兌換銀行券条例(日銀に銀貨兌換の日銀券を発行させる)が定められ、1885年9月に壺円の日本銀行兌換銀券が発行されたのであって、1年の狂いがある。なお、作中でも清がその壺円札3枚を1円銀貨3枚に取り換えてきたことが書かれている。この小説を中学時代に読んだ私はこのくだりが一番

印象深い。なお、清という女は井上ひさしが主人公の親父の不倫相手で実の母にあたるとの仮説を立て、それに対して、奥本大三郎が乳母説を立てている(井上ひさし・奥本大三郎・関川夏央『座談会』漱石をめぐる』1993年10月、岩波書店編集部編『座談の愉しみ』下、岩波書店、2000年、所収、221頁)。旗本の息女だったとの設定だが、それほど魅力的な老女なのである。

なお、夏目金之助は1906年10月21日付の森田米松宛の書簡に「近頃は小便壺の中に浮いてゐる様な気がする。小生も臭いが傍から見ても臭いだらう。去りとて小便壺から飛び出す程の必要も認めない。[中略]サボテンからは芸術的でない」と云はれ露西亜党からは深刻でない」と云はれて、小便壺のなかでアプアプしてゐる。[中略]君オイランの寫真を見てアタイもこんな顔にならうたつてなれやしないぢやあないか。今の文学者は皆此アタイ連である。僕の事を英國趣味だといふものがある。糞でも食ふがいゝ。苟しくも天地の間に一個の漱石が漱石として存在する間は漱石は遂に漱石にして別人とは慣れません。』(『漱石全集』第18巻、岩波書店、1928年、382-383頁)英国紳士風の漱石も糞尿を道具にするに過激党である。思うに、糞や尿は心情を内密に吐露する告白手段として廃棄しがたいものだったのである。

美化の一形象である文学が捨象したほんの一例として、『濯東綺譚』に関して野口富士男が語っている―「[はくは、あれは小説じゃなくて詩だと解しています。『目にしみるような臭さだ』と書いたことがあります。夜遊びに行くときは、浮いた心で行きますから何でもありませんが、一晩泊まって翌朝見たらすごいんです。当時水洗じゃないですから、ため桶から流れているんです。それを見ると、荷風の書いているようなきれいなところじゃまるでない。もちろん、荷風がそれを知らないはずなんです。それを排除して、自分の理想とするものを書いている。』(野口富士男・川本三郎『対談』荷風あとさき』1992年5月、前掲『座談の愉しみ』下、所収、211-212頁)

この野口が語っているなかに出てくる臭さの形容と同様に、しかもそれが特定の若き女性音楽家に対するものになっている一例が、渡部昇一『知的生活を求めて』(講談社、2000年)298-299頁にある。最初は笑っても、笑い事ではすまなかったと渡部博士が書いているほどである。その臭いが特定の個人に由来するものであるとの記憶が残るにつづけて人格批評的な連想にまですら発展している例が、そこに見られる。

河上肇の、杉並区天沼1丁目229番地に仮寓

いま私の記憶を話しましたが、記憶というものは忘れなかったということであります。意味のないものは忘れられるから記憶として残らない。なにがしかの意味を持つものだけが記憶になっている。価値の基準はいろいろあるにしろ、時間が価値尺度基準の一つであることは間違いないでしょう。個人の短い人生にも無数の事実があるわけですが、そのうち忘れられてしまうだけのわずかな価値しかない事実(ほとんど無価値)は時間の経過とともに記憶からどんどん落ちてしまうし、またそれでよいわけです。数十年後にも残っている記憶(有価値)の意味、たぶん皆さんもおわかりになるでしょう。

そして、東京だけでなく、岡山にも理由があったのです。私は岡山で農家の離れに建てられた別棟(1階は農具などの物置になっていた)の2階の3畳の1部屋に下宿していましたが(他の部屋は岡山大学の学生が下宿していた)、その2階に1階まで落下式の共同トイレがあり、ある時、私が使用中に、その農家の御主人が下の方で汲取作業を始められたのです。その農家は前庭がわりと広い畑になっていていろいろな野菜が植えられていました。たとえば里芋が見事に生育して、その葉っぱが大きく開いていたことなど今でも目に浮かぶくらいです。その肥料に我々下宿人のものが使われていたことが分かったわけです。その農家は水洗トイレを導入せず、依然として自家糞尿を肥料に使用していたのです。つまり、現在進行形の事だったのです。したがって、少なくとも私に限っては、新聞記事に興味を持つなというの

は、どだい無理だったことになるわけです。

さて、以上のような記事を読んでいくうち、これは社会経済史の研究対象になると確信しました。むろん、多少の躊躇はありました。かつて作家の火野葦平が北九州の地方都市を舞台に「糞尿譚」という小説を書き、これが1938年3月に第6回芥川賞に決定したとき、このような美しくないテーマではという反対が一部にあったといいます。情緒的要素が不可欠の構成要素となる文学の方面ですら、反対があるのですから、認識的要素が中心になる文化科学の方面では、強い反対が予想されたからです。例えば、そのようなテーマで論文が書けるのか、といった拒絶反応です。しかし、私は日本の農業や歴史に対する認識の基本領域に属する事象(ヒト・モノ・カネが広汎に関係してくる)であると考えます¹⁷⁾。

-
- 17) 近現代日本最大の農政学者と目されてきた東畑精一ですら1949年に、「どうもわれながら甚だ汚い表題で躊躇久しきものがあつたが、やつと之を書いてしまつた。さて内容を書きだそうとすると再びいささか筆が鈍つてきそうである。表題を書くのに二枚ほど原稿用紙をやぶつて捨ててしまつたが、どうも書き終るまでには相當紙屑籠にたまりそうである。[中略]始めから思ひきつて汚い題で我慢し、雑誌で掲載を斷られたら其のまま永久に消えてなくなり、また掲載されても讀者をだますことのないようにしたい。」(東畑精一「糞尿譚」『日本農業のすがた』日本評論新社、1953年、151-152頁)などを書いてある始末である。書きたくても書けない有り様であった。しかし、現代の知識階級の受難史の一齣としてむしろ積極的に書き残されることがある。次のごとし——毛沢東による党権力奪回謀略にして国家独占権力形成過程であった「文化大革命」の終息後に、中国の学者が全国85校のエリート大学・中学・小学校を調査したところ、すべての学校で教師が生徒に拷問され、12校で1人が殴り殺され、1校で2人が殺され、教師が殺された13校のうち11校が中学、2校が小学校で、11の中学のうち4校が女子校だったという。毛が造反有理を唱えて扇動した赤色テロ(紅衛兵の自賛)から逃れえた幸運な教師は反革命とされ便所掃除の任務が課せられ、毛沢東の赤色防衛隊たる紅衛兵の学生たち(天安門前広場

(屋賃22円)していた1938年8月22日の日記に「夜に入りて雷鳴激しく稀に見る豪雨降り注ぐ。忽ちにして床下浸水、便所の汚物水に浮いて流れる。東洋一の大都会と称すといへども、場末の生活の原始的なる様かくの如し。間もなく雨やむ。汚物嫌ひの秀、浸水をひどくいやがる。」とある。([河上肇全集]23, 岩波書店, 1983年, 99頁)この問題が同年10月9日、河上夫妻を中野区氷川町の貸家(実質屋賃24円)に転居させる一因になったのかもしれない。

私は結局、農業史が専門の林教授の記念号に、これに関する最初の論文(ii頁の18, 参照)を書きました。その論文タイトルに「いわゆる」とつけた意味は、すでにお分かりいただけたはずです。新聞の小見出しに、そのように書いてあるという意味でありまして、私の主観が入っているわけではなく、客観的な認識というわけであります。なお、新渡戸稲造と内村鑑三

もこれには関心をもっていたことが分かりましたので、それを証明する短い文章をこの論文の始めに引用しておいた次第です。内村鑑三には何か根深いものがあるように感じられましたので、論文41の註で書いておきました。

さて、20世紀の初頭に、西日本の有力地方都市岡山で新聞記者が書き残していたことは都市肥料(町肥)をめぐる警察・市民と農民の社会的対立でありました。

農民が都市肥料を入手するのに、市民から対価を要求されていた。岡山では「代米」と称する現物形態で、1899年頃まで大人1人当たり1年分に対して糯米1斗(約15 kg、1円2銭2厘)[6人家族だと4斗。4円8銭8厘=金3.1 g]であった。その頃、当地近辺では粳米の年間消費高が1人当たり平均1石3升4合(100)で、糯米の年間消費高が1人当たり平均9升8合(9.5)となっていたから、およそ当時は糯米1斗が庶民の平均1人当たり年間消費量であったと考えられる。1901年には6升(9 kg)~7升(10.5 kg)が標準的相場になっていたようです。県の命令で1902年1月から汲取・搬出時間が10月から3月までの間は午前8時まで、4月から9月までの間は午前7時までに終えるように制限され始め、違反者を警察が摘発するようになったのです。そのために、労働コストが上昇せざるをえなくなり、不満を増幅させた農民側は3升への減額や貨幣形態を要求するようになり、対立(農民と市民の対立が農民と農民の対立に波及)は激化して警察・裁判沙汰となり、仲裁によって大人1人1年分=糯米4升(6 kg)で1906年5月に妥結したといった経過が分かってきました。農民は汲取りを同盟罷業し市民に、どうだまいったかと圧力をかけたのであったが、どうしても肥料が欲しい一部の農民がストライキ破りの挙に出て、両者が衝突するという場面もあったのである。

因みに、米の容量と重量は1石=150 kg、1斗=15 kg、1升=1.5 kg、1合=0.15 kg=150 gである。

に全国から動員された紅衛兵を謁見した天安門楼上の毛に紅衛兵の腕章をつけて有名を馳せた女子学生は後年に米国へ留学し博士号を取得)に生業を奪われた公衆便所清掃員の回顧によれば、そうした教授や学者先生に掃除の仕方を伝授してやったが、便所掃除をやらされた教授先生たちは面目まるつぶれと思っただけで、表面は犬みたいに従順にしつつも、耐えられず便所の梁にベルトをかけて首をくくってしまう人もたくさんいたという。Roderick MacFarquhar and Michael Schoenhals, *MAO'S LAST REVOLUTION* (2006, Harvard University Press). 朝倉和子訳『毛沢東 最後の革命』上(青灯社、2010年、186-187頁)。そうした当事者の一人として、上海第六女子中学(日本の中学・高校に相当)の共産党支部書記・校長だった女性の証言があり、1966年9月16日に北京からやってきた約200人の男女学生の紅衛兵に一夜で「走資本主義道路当権派」(走資路線実権派)とののしられ、髪の毛の半分を剃られ、片目が見えなくなるほど顔を殴打され、半年近く暗室に閉じ込められたあと、その書記・校長職を解かれ、トイレ掃除を2年間やらされたという(邵シャオ愛玲「一老婆の『激動の77年史』」『文藝春秋』2010年7月号、204-205頁)。この中国人女性の上海体験によれば、上海事変後に事実上の日本租界に進駐してきた日本軍も支那人にはひどかったが、解放後の国民党と中共下の文革はもっとひどかったという。なお、ロデリック・マクファーカーとマイケル・シェーンハルスによれば、毛沢東はスターリンやヒトラーとならび、20世紀最大の暴君として歴史上に位置づけられることになるかもしれないという(前掲『毛沢東 最後の革命』上、340頁)。なお、中国共産党支配下では「社会排泄論」があり、社会主義社会の排泄物は階級隊列の純潔化のために排泄すべき党の敵対者であるという屁理屈があったという。また、文革の美名のもと、例えば人肉食といった原始的な野蛮がまかりとおり、悲惨な犠牲者が続出していた。(同上訳書『毛沢東 最後の革命』下、31頁、35頁、39頁)

なお、この論文のために後回しになった韓国農業奨励組合については、北海学園大学学長をされた田中修教授の記念号に最初に書き(iii頁の23, 参照)、経済学部50周年記念号の論文(iii頁の35, 参照)で完成させることになりました。

そして、岡山については長岡新吉教授記念号に続篇(ii頁の24, 参照)を書き、汲取市営化構想の内容(例えば、売却収入として4万円を計上し、うち半分の2万円を市民に還元するといったことなど)や、また農民の間での分裂の一つの原因が春の彼岸ごろの麦作のための肥料問題にあったことなどを明らかにすることで一応完成させたのであります(紀要の頁数で合わせて103頁になった)。

そして、都市肥料であれば最大の都市、一国の首都東京のそれを取り上げる必要があると考え、それに着手したのが佐藤茂行教授記念号に書いた論文(iii頁の26)です。かつて戸谷敏之という優れた研究者がいて、戸谷論文には大審院民事判決録の史料的価値が注意喚起的に書かれていました。それで、『明治前期大審院民事判決録』を利用することにしたのです。この論文では、惣雪隠と異なる戸別雪隠の形成や下掃除代と下掃除道地代との関連などを問題提起し、その解を示したつもりです。しかし、下級審の判決は見る事が出来なかったのです。

この前に、吉川弘文館から依頼原稿があり、1993年に「韓国併合」という論文(iii頁の25, 参照)を書きました。その時点での、私なりの総括をしたものです。

さて、明治前期大審院民事判決には関連する2次史料が二つ残っていました。

その一つは解釈が容易でなく、原本との対照が必要になり、最高裁判所で閲覧することになるなど手間取っていました。これが結果的には待機した形となって、幸いしたのです。北海道大学法学部の瀬川信久教授と高見進教授からご教示いただいたことがありましたし、下級審の判決原本が閲覧できるようになったからです。

それらを用いつつ、それに関連する史料を探しあてて援用し論文を書きましたが、完成までに8年の時間が経過していました(iii頁の28, 39, 参照)。東京市中の1880年の15区ごとの地主家持・借地家持・借家人の戸数ならびに構成比を算出するなど新知見を示しつつ、下掃除代が差配人の給料になっていたことなどを明らかにしたものです。元原告と元被告のかつての住所(現在の江戸川区西小松川町と墨田区千歳)を訪れることもして、多少の感慨を抱きました。私にはいわゆる the daughter of time に出合ったという気持ちがおのずと湧いてきたのでした。

残る一つの大審院判決は第200号記念号に書きました(iii頁の41, 参照)。上告人側に鳩山和夫代言人がついていたので気にかかっていた2次史料でしたが、これも原本との対照を最高裁判所で行なう必要がありましたし、下級審の判決原本も閲覧できたのです。借地家持の税金問題との関係についての新知見や東京下肥経済算術を示し、これによって、毎日4,930人、1年間の延べ人数では1,799,450人の汲取運搬人がいたことになり、1884年の東京15区の下肥価値は60万円以上、現在の貨幣価値なら180億円以上になることを論証したつもりです。

さて、ようやく、A4サイズ抜刷のなかの論文の方に移ることにします。下掃除に関する民事訴訟で元大名を被告にすえた事件がありましたので、それを紹介することから始めました。東京裁判所(今でいう東京地裁)に訴え出た農民が住む南葛飾郡立石村は抜刷資料の129頁の図1の右上の所にあります。元大名が住む浅草区小島町は128頁の隅田川の下流にかかる厩橋から左側真横に目を移した所にあります。幕末における、その大名屋敷は133頁の図3のなかの「大久保佐渡守」がそれです。この立石村と小島町の距離は近いわけではないが、その間の運搬には135頁の表1に見られるような「肥船」が用いられたであろうから、比較的容易であったと推定できる。水運の活用である。

大名屋敷が、空間および人口に占める構成的比重は、136 頁の表 2 に見られるように大きかったわけですから、日本の首都の下掃除を歴史的に問題にしようとするれば、どうしても取り上げざるをえなくなるわけです。しかも、その研究においては、一般論や抽象論では駄目で、具体的でなければならないという条件がある。私は 138 頁の図 4 に見える世田谷村、弦巻村、用賀村、経堂在家村、八幡山村、大蔵村の 6 カ村に住む農民と、140 頁の図 5 に見える「井伊中将」、つまり彦根藩¹⁸⁾上屋敷¹⁹⁾、との間の下掃除を媒介とする社会経済的関係を根本史料に

もとづいて追究してみようとしたのであります。なお、お配りしてある 1 枚ものの地図(図 1)からは、この 1 枚で両者のだいたいの位置関係が比較的わかりやすいだけでなく、その往復の行程を想像するうえで参考になるはずです。図中の大山街道沿いの三宿(みしゅく)から西方面に 6 カ村が点在します。

さて、その根本史料の一つが、お配りしてある A4 サイズで 5 枚がとじてあるもので、これが 141 頁の表 3 の典拠、つまり荒井家文書 101 の一部分です²⁰⁾。読み砕く、という表現を使ってもよいであろう作業によって作成したつもりの表 3 のなか、○印の番号によって示した 24 人のうち、数人が出てきていることがお分かりになるでしょう(2 枚目の最初の名前は①、3 枚目の 2 人は氏名とも出ており、4 枚目の名前は①②③④⑤、5 枚目に 3 人の氏が「様」付きで出ています)。

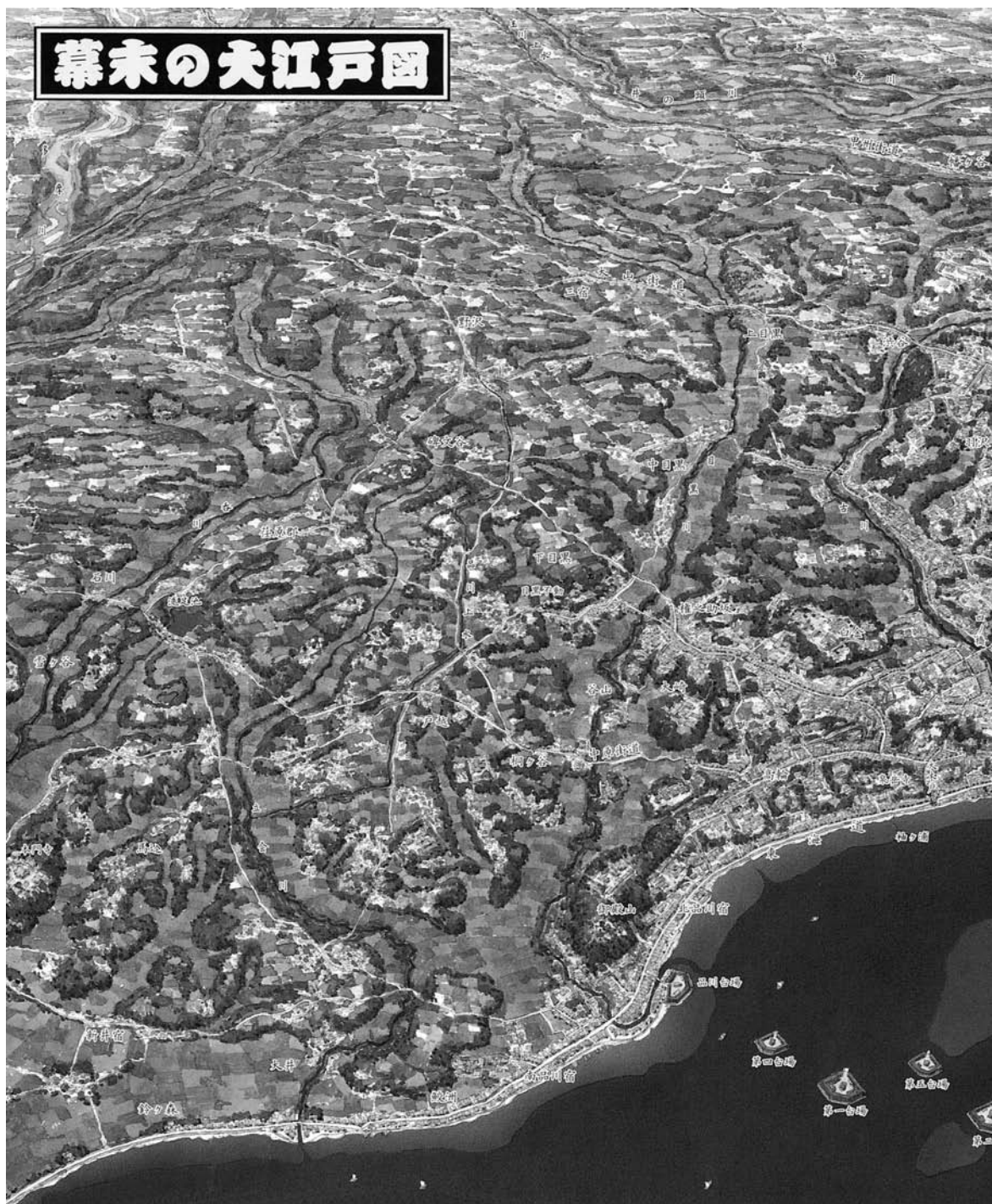
この表 3 と、それに続く諸表や関連諸史料(註を御覧ください)に基づいて、明治初年まで存在していた大名屋敷群という氷山の一角について、その下掃除をめぐるヒト・モノ・カネという都市肥料経済の実体をやや明らかにしえたか、と考えます。下掃除を担当した農民が何日に、どれくらいの量を搬出し、その価値はまず銀目で把握されたあと、金貨単位に計数幣化されていました。その銀目は増量傾向にあったのでした。このように史料が意味するところを私は叙述しましたから、ここで詳しく繰り返す必要はないでしょう。読んでいただければ分かる

18) 掃部頭として溜間(たまりのま)詰筆頭譜代である名門雄藩。赤備え(井伊直政以来の具足・馬具などをすべて赤で統一した軍勢)として有名。因みに、安政 7 年 3 月 3 日(上巳の節句、雛祭り。3 月 18 日に万延と改元)に桜田門外の変事が起きたとき彦根藩士が着用していた雨合羽は赤合羽だったという(吉村昭『桜田門外ノ変』新潮社、1990 年、324 頁)。なお、この事件後の戯れ言に、「桜田騒動途方もない、そこでどうやらお首がない、首を取っても追手がいない、お駕籠こわれて昇き手がない、お番所どこでも止め手がない」、「かもん様ご無事にお帰りと申す声を聞き、奥方様お迎えなされ、程なくお駕籠入り来りしゆえ、お供方お戸を引き候ところ、奥方様仰せには、コリヤ胴じゃ」という(野口武彦『井伊直弼の首』新潮新書、2008 年、182-183 頁より引用)。庶民の鬱憤ばらしである。

19) 江戸城の桜田門から真向かいの豊後杵築藩上屋敷(今は警視庁)をはさみ直線距離で約 500 ㍎の外桜田にあり、その表門は桜田門の近くの壕端から見え、その門が現在の国会前交差点に面していた藩邸は現在の三宅坂あたりに広がっていた(吉村前掲書 314 頁、野口前掲書 174 頁)。なお、滝口康彦原作を映画化した小林正樹監督作品『切腹』で舞台設定されていたのは、この井伊家上屋敷である。1962 年に上映されたこの時代劇にはヨーロッパの国際映画祭で観客の女性を卒倒させたほどの石浜朗による一世一代の演技がある。劇中、井伊家の代名詞のごとく「あかぞなえ」という台詞を福島家来役の仲代達矢に幾度も語らせている。この橋本忍脚本の写真の冒頭は堂々たる甲冑を映し出し、その意味を問いかけるがごときで、モノクロームのために色は分からない仕組みになっていたが、赤い色だったのである。

20) 「常識の世界には記録の証拠などは無いから、忽ちにして大きな忘却が始まり、以前はどうだったかを知る途が絶えて行くのである」(『先祖の話』1946 年、前掲『定本柳田國男集』第 10 巻、所収、3-4 頁)が、この文書はその種の忘却から今人を目覚めさせる一助になりうる史料的价值をもつであろう。これが柳田の最高傑作という見方(例えば、色川大吉『私の柳田國男』『文芸読本柳田國男』河出書房新社、1976 年、所収、72 頁)もある本書には「国民をそれぞれに賢明ならしめる道は、学問より他に無い」ともある(5 頁)。

図1 幕末の大江戸図(部分)



出典：「幕末の大江戸図」(発行／株式会社 ジェオ，協力／学研，監修／正井泰夫，絵／黒澤達矢)より転載。



ように書いたつもりです。農民は正確を期して克明に、したがって細かく記録している。計数貨幣が錢貨の文単位まで計上され、秤量貨幣が匁(1貫の1/1000で3.75g)、分(0.375g)にとどまらず、厘(0.0375g)単位まで計上されている。

日本近代貨幣制度樹立直前の明治初年や幕末にさかのぼる江戸・東京西郊在住の農民の勘定のミクロコスモスは迷路のように感じたが、しばしば断ち切れんとした推理を諸史料で連続させて、合理的理解に達することが出来たのではないか、と思います。

ただし、気掛かりな点が残っている。例えば、かち荷と車荷の関係である。車荷が少なすぎる。かち荷と書いてあるが、車荷ではなかったのかという疑問である。しかし1荷を車荷にすることはまず考えられない。1荷づつの場合、かち荷と考えて間違いない。また、名主クラスが実際に下掃除に行ったのかという疑問もある。ともあれ、疑問があつて、はじめて、それを解く必要が生じる。私は、2次方程式的条件程度は示したつもりです。

ある人から私は、そういうテーマは好事家だね、と言われたことがあります。好事家については柳田國男が書いていることが参考になるでしょう。「事を好むといふことが、果して学問の上にもなほ厭はしいことであるか否かは、各位と共に是非討究して見なければなりません。ちつとやそつとの骨折では、到底解けさうにも思はれぬ問題が、この世の中に有ることは確かだが、それへ近よつて行くと一筋の途は、行く手に横たはるもつと小さな障碍、即ち釈けば釈かれる問題を一つでも数多く、処理して進むより他はありません。それが仮に大疑の片端で無いとしても、少なくとも問題は答ふべきものであり、又答へ得られるものだといふ経験は養はれるのであります。歴史の方面には、今まで知らぬことを知らぬとは言はずに、そんな小さな問題は答へるに及ばぬと、言つてごまかす者が時々ありました。その小さいといふことは如

何して知つたかと、私はいつも冷笑して居るのでございます。²¹⁾」

おそらく、柳田も好事家と言われたのでありましょう。柳田は大学者ですから、そういう人を軽蔑して心の底ではあざ笑っていたのかもしれない。わたくしは柳田のような大学者ではありませんから、好事家？、そうかもしれませんね、とほほ笑んで²²⁾いるだけであります²³⁾。

21) 『神道と民俗学』1943年、前掲『定本柳田國男集』第10巻、所収、336-337頁。柳田は日本民族の自問を具体化し日本列島の全域にまたがる大きな疑問符を書いたと評された(井伏鱒二「柳田さんのこと」『現代日本文学全集』12、筑摩書房、1955年、407頁)。

22) 笑いにも、いろいろある。笑いを貴賤の二つに区別し下品な笑いの方は賤しく汚いとして等閑視しつつ上品な笑いの方は美しく良いと偏重する柳田國男を批判し、その一見つつましうで一見謹厳なお上品純粹派ぶった偽善的なにのする方よりも、偽悪的でも粉飾せざる赤裸々な下品といわれる方にこそ、汚れをいまだ知らず純真無垢だったらこそ人類原初の野蛮を一過性的に通過する子供のするような無作法なりとも健康な笑いの本領があると林達夫は喝破している(「上品な笑い 健康な笑い」『文学』1958年1月号、山口昌男編『近代日本思想大系26 林達夫集』筑摩書房、1974年、所収、321頁)。また、微笑の極上の意味についての一例が「どんな薄のろだつて経済学者になることはできるが、」と過激に始まる一節(アルフレッド・ベルレス著、筒井正明訳『我が友ヘンリー・ミラー』(立風書房、1974年、121-122頁)にある。微笑が幼年期では難しい所以である。微笑とそのしぐさを形象化した美術技工の極致はレオナルド・ダ・ヴィンチの「洗礼者ヨハネ」(ルーヴル美術館蔵)であろう。因みに、ベルレスによれば、1930年頃の仏国の首都は「両半球の文化の胎児を養う芸術的な子宮、パリをめざし、世界の画家や文学者が陸続と集まってきた。」「いかなる自由もドルの有無にかかっているアメリカのような国では知ることのできなかった、内的な自由が愉しめた。」(前掲筒井訳書、13頁、28頁)これと類似な事を高村光太郎も書き残している―「パリは珍しくもないやうな顔をして／人類のどんな種族をもうけ入れる。思考のどんな系譜をも拒まない。／美のどんな異質をも朽らさない。／良も不良も新も旧も低いも高いも、／凡そ人間の範疇と事物の自浄作用にあとはまかせろ。」

所定の時刻が到来しました。19世紀後半に、問われて名乗るもをこがましいが、という科白²⁴⁾が御座いましたが、をこがましい、という日本語が今日の私にはピッタリでした。そもそも私が最終講義などとはをこがましいが、これは権利でもあり義務でもあるところえ、職務遂行の一つとして、この場に臨んだわけでありました。

(『日本の詩歌10 高村光太郎』中央公論社、1967年、349頁)、「パリへ来ると、西洋にはちがいないが、まったく異質のものではない、自分の要素もいくらかはまじっているような西洋、つまりインターナシヨナル的西洋を感じて、ひどく心がくつろいだ。ニューヨークやロンドンでは自分が日本人であることをいつでも自覚しないではいられないが、パリでは国籍をまったく忘れる時間が多かった」(同上書、350頁)。「Paris, c'est une blonde/ Qui plait à tout le monde/ Le nez retroussé, l'air moqueur/ Les yeux toujours rieurs」(ÇA, C'EST PARIS sung by Mistinguett) ミスタンゲット(1873-1956)はムーラン・ルージュやフォーリー・ベルジュールなどのミュージックホールで大人気を博した女優・歌手で、1909年の写真が残っている(『パリの肖像-ナタール写真集』立風書房、1985年、157-159頁、177頁)。彼女が歌ったサ・セ・パリは後年日本映画史に残ることになる小津安二郎監督作品『東京暮色』(1957年)のなかで実に効果的に用いられている演奏曲のもとうたである。

因みに、1929年パリの画廊でのダリの個展のために序文を書いたブルトンは「いたましき遊戯」(図38、ノアイユ子爵が購入)に糞便愛好症的要素を見出したので、その執筆を長い間ためらったという(岡田隆彦責任編集『現代世界の美術18 DALI』集英社、1986年、96頁)。なお、パリが花の都たりえたことの下部構造には下水道があったはずである。エッフェル塔の近くセヌ川のアルマ橋左岸にMusée des Egouts 下水道博物館がある。

- 23) 「或る人が、『あまり多くの人々から知られない学術のためにどうしてそんなに苦勞するのか?』ときかれて、『私はわずかの人に知られれば十分だ。一人でも十分だ。いや、一人もいなくても十分だ』と答えた。」(モンテーニュ著・松浪信三郎訳『随想録(エッセイ)』<上>『世界の大思想』4、河出書房新社、1970年、211頁)

- 24) 河竹黙阿弥作「三人吉三廓初買」(安政7年)

わたくしが今日まで、研究を続けてくることが出来ましたのには、なによりも経済学研究科・経済学部事務長・会計係・教務係・庶務係・図書係、の歴代の職員の方々のお力添えがあったればこそです。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。学部内外の教員各位、教育の場での、同伴者であった大学院生・学部学生諸君、に感謝いたすはもちろんであります。

これで、わたくしは大学の講壇から去っていきます。ご清聴くださった皆さん、有難う。

「講義は直観的で、或者の上に強い光線を投げることがある。」²⁵⁾

- 25) 森鷗外「キタ・セクスアリス」(明治42年)。「どういう仕方どういう手段で認識が対象に関係するにしても、いやしくも認識が対象に関係する場合に、両者の直接の媒介をなし、すべての思惟が手段として求めるものは直観である。」(カント著・高峯一愚訳『純粹理性批判』『世界の大思想』10、河出書房新社、1970年、63頁)

なお、真相分析的な伊藤整になると、「ほとんどすべての講義は、十年も教壇の上で眠っていたような生命のないもので、学説の継ぎはぎであった。それは実社会で何の役に立つあてがないとともに、研究上の生命もない剥製のような講述であった。」とか、「大学の講堂で死んだような講義を三十年も続け、意味もないよぼよぼの細い首すじの白髪頭となって音も立てず消え去る」とかの観察となる(『破綻』1937年、『日本文学全集48 伊藤整集』新潮社、1959年、所収、39-40頁)。因みに、この作品のなかで伊藤整が例外的に或る講義風景をかなり詳しく回想し、しかも好意をもってではなく描写しているのは大塚金之助の講義ではあるまいか。その後、津島修治の自裁(昭和23年6月)にも容赦しなかったこの学者作家のラディカルな批評(例えば、「逃亡奴隷と仮面紳士」1948年)は、「教授、助教授、助手などという形式的な権威の組織を作って、本当は学問の入り口に過ぎない幼稚な知識を、外国の研究書の中から拾い出して、二十歳前後の青年たちに口述している大学」(『氾濫』1958年、『日本の文学』59、中央公論社、1965年、所収、139頁)といった辛辣となった。この小説には戦後日本社会で大学内階層序列のはしごをはいあがるための立身出世手段としてマルクス主義的理論を一時便宜的に利用する一部の大学人の心理と行動も描写されている(同書、185-186頁)。

〔後記〕

最終講義のなかで名前を出した大塚はその最終講義の速記に加筆し1年10カ月後に活字化されている。かつて、それが収録されている『大塚久雄著作集』第9巻(岩波書店、1969年)を読んだとき、なるほどと思ったが、その前口上のなかの「少々堅くなっておりますが、一つ勇を鼓して」(同書、297頁)を見て、これほどの大家ですらそうなるのか、と意外に思ったものである。また、初めて学部演習に参加したときの最初のテキストの著者である山田盛太郎(1979年1月19日に日本学術会議講堂で開催された日本学士院創立百年記念講演会での講演「わが国における経済学発展の特異性」を、大石嘉一郎先生と同席して聴講したことがある)の最終講義は本人没後21年たって1冊本(小林賢齋編『資本主義構造論：山田盛太郎東大最終講義』日本経済評論社、2001年)として刊行され、勉強になったことがあった。『分析』の著者による解説がなされていたからである。不遜にもこれらと比較しているのではない。これらを大きな山々とすれば、小さな丘ていどのものがあってもよいと思ったまでのことにすぎない。この超一流の先学から何級も下がる一介の小学究にすぎないにしても、最終講義の機会を与えられたからには、その記録は残さないよりも残した方がよいに決まっている。わざわざ聴講しに来ていただいた方々に、報いられるやり方でもあるだろう。当日配布した口述原稿より本稿は分量が増えており、その増量分は聴講者への返礼の意味にもなるはずである。そして私としてはただ、『最終講義』(実業之日本社、1997年)を繙読して、その雰囲気を感じてははその抗しがたい魅力を感じたことがあった。この、最終講義を活字化していくつか取りまとめて一書としたもののなかで、例えば清水幾太郎(1907-88.最終講義1969・1・18)に見られるような、あたかも落日の直視できる陽光の輝きに、願わくば自分も重ねあわせてみたいと思ったのである。こんなことを書くのも、従来の定年退

官に学問官僚臭を嗅ぎ取った清水や桑原武夫(1904-88.最終講義1968・3・21)の慧眼から形式的にのみ免れた定年退職としての告別講義であつたがゆえの、離別につきまとう一種の甘い感傷気分から逃れえなかったせいであろう。そうした甘味も、貝塚茂樹(1904-86.最終講義1968・3・22)の「けっきょく、歴史家というのは、史料がなければなにもいえない。史料をくわしく読んで、その新しい解釈が少しでも含まれていたらよい。……無理をやりながらも、やはり確かな実証をふまえている人々の論文は、おそらく永久に残るだろう。そうでない、単なる理論闘争に終わっているものは、全部消えていくと私は見ている。そしてなんの利益も後世に残していかないだろうと思っているわけです。たいへん失礼なことですけれども、そういうふうに考えております。」(同上書、291頁)で、苦味に転じることになる。西脇順三郎(1894-1982)が慶應義塾大学名誉教授になった1962年に刊行した詩集『豊饒の女神』に収められている「最終講義」には、「舌はかわいて煉瓦のように／かたくなつて言葉が出されない／この恐怖の午後／でも何ごとか自分のことを／言わなければならないのだ／何ごとか感謝すべきだ／いつしよに酒をのんだ人達の前で／別れの絃琴をひかねばならない／[中略]せんぞくの肥舟とサンマと染物屋と／[中略]人糞を運ぶ牝牛とアイヴァンホー」(鍵谷幸信編『西脇順三郎詩集』白鳳社、1967年、149-150頁、153頁)とある。文化勲章受章者となるこの学者詩人が最終講義を前にして緊張のさなか半生を回顧するなかで、下肥の記憶がその運搬手段という具象をもって鮮やかによみがえっていたのである。なお、最終講義に対する評言としては渡部昇一『知的余生の方法』(新潮新書、2010年)38-39頁が傾聴すべきものである。

最終講義の準備段階で、職員の方々にはお手伝いいただいた。謝意を表する次第である。最後になったが、講義終了時にそれぞれ花束を差し出された、研究室を唯一隣とする肥前洋一

准教授と、演習生 OB の池田憲保・坂下哲也・竹野学・中島代博・森久綱らの諸君に、厚く御礼を申しあげる。

また、2010 年 4 月 7 日には延世大学の尹起重名誉教授がソウルから、3 月に停年退職した貴殿は最終講義をしたはずだからその内容を送ってほしい、という意味の電話をしてこられた。ともかくここに、ようやく公表の運びとなり、予定より大幅に遅れることになったが、聴講者の皆様に約束違反とならなかったから、安堵せざるをえない。All's Well That Ends Well. Last is better. Je sais tout est fini.

“Gee. Things work out awful funny sometimes, don't they? / Yes, they do.” (Titling *Splendor in the Grass* written by William Motter Inge[1913. 5.3 - 1973.6.10])

最終講義配布資料

① 田中愼一「明治初年の大名屋敷をめぐる都市肥料経済」『経済学研究』(北海道大学)第 59 巻第 4 号、2010 年 3 月、抜刷、の A4 サイズ拡大コピー。

② 「幕末の大江戸図」(発行/株式会社ジェオ、協力/学研、監修/正井泰夫、絵/黒澤達矢)の部分コピー。

③ 『明治二年 巳七月より十二月迄 御上屋敷下掃除駄数取調帳 十二月二十四日 世話方』(荒井家文書、文書番号 101、世田谷区立郷土資料館所蔵)のマイクロフィルムからの部分コピー。